

笑顔で介護ができる未来

木更津市立木更津第三中学校 3年

唐亀 真翔（からかめ まさと）

忘れてしまうことの不安や恐さ、忘れられてしまう寂しさや悲しさ。どちらの立場もととても辛い。また、そんな中でも現実と向き合い、介護をしていかななくてはならない家族。逆に、介護をしてもらわなければ、生きていくことができなくなってしまった家族。

今まで、ニュースなどでしか見てこなかった介護の現実。実際にぼくたち家族がそのようになるなんて。いつかそんな日が来るとはわかってはいた。けれど実際に介護を目の当たりにすると、行動でも、資金の面でも、とても大変なことなんだ、と改めて実感した。

九十四歳と九十二歳。ぼくの曾祖父と曾祖母の年齢だ。とても長生きだと思う。元気に、少し不便はあっても大半の生活を2人で送っていた。昨年秋までは。

昨年の十一月、曾祖母が入院、手術をした。曾祖母の体調の変化に気付いたのは母だった。急いで救急車を呼んだ。あと数時間遅ければ命の保証はなかったそう。

そんな中、今度は曾祖父が腰を打ち、救急車で運ばれて入院してしまった。

2人の長い入院生活が始まった。

入院している病院は別々だった。でも、母は時間が少しでもあれば、ぼくたち家族をお見舞いに連れていった。たった十分でも。ほぼ毎日会いに行っていた。

「どうしてそんなに毎日行くの？」とぼくが聞くと、「お年寄りだね、病院にいると色々なことを忘れてしまうんだよ。」と言った。続けて母の言った一言がぼくにとって忘れられない一言だった。

「忘れたくない大好きな人まで忘れてしまうって、どれだけ怖いと思う？」

大好きな人なんだから忘れることなんてないと勝手に思っていた。ぼくは大好きな人たちのことを忘れることはない。

忘れたくなくても、忘れてしまうんだ。大好きな人も、食べ物も、場所も。恐いだろうな。不安だろうな。そう思った。

ぼくたちは、時間がある限り、毎日のように顔を見せに行き、写真を持って行き、たくさん質問し、たくさん話した。

忘れられないように。忘れさせないために。

退院してからの曾祖父と曾祖母は著しく体力が衰えてしまった。ぼくたち家族だけではどうすることもできなくなってしまい、無力さを感じた。

そんな中出会ったのは、ケアマネージャーさんや、介護ヘルパーさんだった。ぼくたち家族のヒーローだ。

優しく語りかけてくれる姿はまるで天使のよう。元気いっぱい満面の笑みで楽しく話してくれる姿は、エネルギーを注入してくれているかのよう。どんな緊急事態があっても、冷静に、手際よくこなしていく姿はとてがかっこ良い。

そんなぼくたち家族のヒーローたちを調整してくれたり、提案してくれたり、お金の計算をしてくれるのが、ケアマネージャーさんだ。ヒーローの中のリーダーだ。

介護は優しさだけでは難しいと感じた。ぼくが思っていた以上に厳しい現実だった。

理想は、家族で協力してみんなで楽しく過ごし、体力がつくように好きな物を食べさせてあげ、たまには車イスで散歩なんか良いな。そんなふうに思っていた。

実際は、物忘れも多くなり、とろみ食を作らないといけなくなり、夜中だろうと早朝だろうと起きて呼ばれてしまう。何より一番感じたことは、とにかく資金が必要だということ。何をするにも資金がないと困る。

動けない高齢者にも人権はある。当たり前だ。けれど、高齢者が増えている今の時代、国からの高齢者への支援が十分に備わっているのかな、と疑問に思う。

今の社会、声を大にして、「高齢者一人一人全員にしっかりとした人権があります！」と言えるのだろうか？言えないと思う。

ぼくも家族も、曾祖父、曾祖母のことが大好きだ。できるだけことはしてあげたい。

ただ、頑張りすぎると疲れてしまう。よくある介護疲れでの虐待などを引き起こす原因となる。なぜなら、介護の終わりは見えないからだ。

数年前に曾祖母が、「長生きなんてしたくない。」と言っていたことを思い出した。当時は、なんでそんなこと言うんだ、と思ったが逆の立場で考えたら、ぼくもそう思ってしまうかもしれない。

介護をしていると「ごめんね」と謝る曾祖母。「迷惑かけて悪いな。」と言う曾祖父。

謝る必要なんてないし、迷惑だとも思っていないよ。大丈夫。そう思いながら、言葉で伝えながら、会いに行っている。

高齢者がいる家族が、簡単に手続きをして手助けを利用できる制度や、一人暮らしの高齢者が、安く安心して助けを求めることができる社会になるといいな、と思う。

「長生きっていいね。」と高齢者が思える、そんな日本社会にしたいと、ぼくは思う。